

TCVV 白書

特別記事: ナナブンノニジュウニの衝撃
調査記事: ラブライブ!声優の動向について

The TCVV Whitepaper 2018 NO. 21



声優は Visual に出るな！宣言 Ver1.11

声優は Visual に出るな会議 決議第 00000 号

声優は映画俳優・舞台俳優に比べ声だけで勝負をするという過酷な生業である。映画・舞台俳優は身振り手振りが付加されるので視覚に訴えることが効く。が、声優はそうは行かない。だからこそ高度な演技力が必要とされるのではないだろうか。現在、第四次声優ブームと言われているそうだが、何か違和感を感じずにはいられない。最近の「声優」と呼ばれる人々は Visual、その他のメディアに頼りすぎ・出過ぎではないだろうか？今やマーケティングでメディアを十分に活用すれば、そこら辺のお姉ちゃんでさえも CD をあつという間に売ってしまう。この状況を「沈黙のミリオンセラー」*1とは良く言ったものである。「声優」自体が今やメディア戦略によって商品になってしまったと思う。この戦略は聴衆を気がつかない間に購買者に変えてしまう巧みなシステムだと考える。しかし、このシステムは本来の価値。つまり「声のプロフェッショナル」としての声優を正当に評価していないものであると言える。

舞台俳優の中には決して Visual に耐えられる人ばかりではない。が、そのような人が舞台に立てるのは、人を引き付ける演技力を持っているためであると考え。一方、声優の質は低下している。これは最近のアニメーションは高度な演技力を必要としないものが多くなっているからといえよう。そうなれば声優の質が低下するのは至極当然のことである。*2 従って、高度な演技を必要とする作品では声優の能力の限界が露呈してしまう。例えば、劇場版新世紀エヴァンゲリオン最後の最後はアスカのほんの一言で終わる。*3 しかし、この台詞は始めに用意してあったものとは違うものであったようだ。本来は「あんたばか？」であったようだった。が、声優の力量不足のため、結局「気持ち悪い。」へと変更を余儀なくされた。完全に声優が役に負けてしまっていたのである。結果、作品は中途半端に仕上がってしまい損害を被ったのは我々聴衆者である。

声優が新境地を求めるのもいい。しかし、声優も役者であるのだからまず足場を固めてから進出するのが筋と考える。我々は、健全な日本アニメ・マンガの質を守るため、ここに「声優は Visual に出るな！」を宣言する。

*1 誰もが知っている訳でもないのに 100 万枚以上売ったレコード・CD のこと。一昔前は 100 万枚といたら大部分の人がその曲を知っていた。

*2 劇場版 Evangelion のパンフレット（春、夏ともに）にて清川元夢氏はプロ意識なき声優への批判とも解釈できる発言をしている。これは非常に勇気ある発言と言える。（普通はこういう事は映画のパンフでは言わないであろう。）

*3 実は Evangelion はヲタク（庵野氏）によるヲタク批判であったことはあまり報じられていない。ヲタクの皆様はそのメッセージを受け取れなかったとのこと。（レイとシンジが列車に乗っていて会話をするあのシーンが批判部分とされている）

目次

巻頭言	4
1 第 21 回 TCVV 短期アニタレ観測調査	5
1.1 TCVV 短観概要	5
1.2 調査期間	5
1.3 集計	6
1.4 傾向分析	7
1.5 際立つ状況	8
1.6 気になる動き	8
1.7 定点観測	9
2 ナナブンノニジュウニの衝撃	10
2.1 ナナブンノニジュウニ、発表当初	10
2.2 彼女たちを甘く見てた	10
2.3 秋元の恐しさを見た	11
2.4 評価はこれから	11
3 ラブライブ!声優の動向について	12
3.1 μ's と Aqours	12
4 声優システム論 14-声優化アイドルを考える-	15
5 Chairman's free talk -議長放談-	17
編集後記	18

声優化アイドルという脅威

声だけの仕事だった声優が本格的にアイドルとして注目され始めたのは 1970 年中盤の第 2 次声優ブームからである。

その後の第 3 次、第 4 次声優ブーム (識者によっては第 4 次は無いとの考え方もある) ではさらなる積極的な顔出しによりアイドル声優 (アイドル化声優) が誕生した。

当時の業界はアイドル化を急ぐあまり演技そっちのけで顔出しを重視する風潮があった。

TCVV はそんな当時のアイドル声優の下手さを憂いて設立され、ゴマメの歯ぎしりと分りつつも作品を守るため今日まで声優のアイドル化に対して様々な苦言を呈してきた。我々を応援してくださった方々に対して本当に感謝の念に堪えない。

しかしながら今や声優のアイドル化は最早止めようがなく、無力さを改めて感じた。

声優のアイドル化は進行してしまったが業界の努力もあってか今では聞くに堪えないほどの職業声優は殆どいない状態となっている。これは幸甚である。

昨今のアイドルアニメブームにより、新しい形が次々と登場しアイドルが声優の領域に多数踏みこんで来ている。

20 年前は若い女性職業声優がテレビに出はじめたり、数組が声優ユニットを組み始めていた程度の時代。

非声優なアイドルがユニットを組んでアニメに出るなんて考えらなかった。

我々は『アイドルの声優化 (声優化アイドル)』と称しアイドル声優 (アイドル化声優) と区別している。両者の違いは軸足をどこに置いているかである。

前者はアニメに軸足を置いたアイドルっぽいことをする職業声優であり後者はアイドルに軸足を置いた声優っぽいことをするアイドルである。

前述したようにアイドル化声優は大部マシになった。

だが、今新たな脅威として声優化アイドルが **実害を伴って非常に有害**であると考えている。

多くの場合アイドルの声優化は本人の売り込みに多用される。

作品が当該アイドルの売り込みに使われるだけでも堪え難いのに多くの場合、ヘタクソな棒演技で愛着のある大切な作品を壊してしまっている。

このような実害が出ている以上、ロクな演技もできず作品を破壊するだけしかない有害なアイドルの声優化は言論をもって徹底的に潰さねばならないと我々は考える。

平成の世が終わり来年には新元号になるが我々も転換を迎える必要があると考える。

本誌冒頭に掲げている TCVV 宣言は職業声優に対してであるがこれからの TCVV は敵となる相手を広げる覚悟で声優化アイドル化への追及を主たるミッションとする。

これも一義に作品群を守りたいという基本方針が根底にあるためである。

1 第 21 回 TCVV 短期アニメタレ観測調査

TCVV 情報管理部 調査課 短観担当

1.1 TCVV 短観概要

経済指標を示す「日銀短観（日本銀行短期経済観測調査）」のようにある期間に区切りアニメタレントの出演数を調査することにより現状の動向を分析する。

データは「しょぼいカレンダー*4」から TCVV の算出基準*5により機械的に抽出したものである。

集計方法は新規出演数を四半期毎に集計し合算した後、4 で除することで四半期当たりの新規出演数の平均値を算出する。この値を「短期的な活性度（単純活性度）」と定義する。

ただし、人間は忘却をする性質があるので『単純活性度』だけでは感覚に合致しないと考える。最近の出演した方がより印象が深い。そこで人間の感覚を取り入れるため過去を割り引いて考えた『感覚活性度』も同時に算出する。

具体的な算出方法は 4Q 前は出演数に 0.25 を、同様に 3Q 前は 0.5、2Q 前は 0.75 を乗ずることで重み付けし人間の感覚により近い活性度を算出する。

活性度が 1.00 以上ということはクォータ毎に平均して新規 1 本出ていることになりコンスタントに新規出演していると言える。言い換えれば『常に新しい状態』である。

順位に関しては感覚活性度を優先とし、感覚活性度が同値の場合は単純活性度で比較した。また調査結果については誌面を圧迫するため男女とも上位 40 名までの掲載とした。

(標本数 女性 260 名)

1.2 調査期間

西暦 2018 年 1 月～2018 年 12 月

本調査は十分な調査をしていますが内容を保証するものではありません。
また今後の動向については現時点でのデータからの予想です。

*4 <http://cal.syoboi.jp/>

*5 無料放送の TVA レギュラ出演のみで単発出演は除く

1.3 集計

2018年TCVV短期アンケート観測調査

順位	氏名	2018/4Q	2018/3Q	2018/2Q	2018/1Q	単純活性度	感覚活性度
1	悠木碧	7	3	8	4	5.50	3.56
2	M・A・O	5	5	4	6	5.00	3.06
3	佐倉綾音	4	3	9	5	5.25	3.00
4	茅野愛衣	5	3	7	5	5.00	3.00
5	東山奈央	7	3	4	2	4.00	2.94
6	洲崎綾	4	3	6	1	3.50	2.38
6	日高里菜	6	1	4	3	3.50	2.38
6	三森すずこ	6	1	5	1	3.25	2.38
9	釘宮理恵	4	2	7	1	3.50	2.31
9	遠藤綾	3	6	1	2	3.00	2.31
11	日笠陽子	3	4	4	4	3.77	2.25
11	小松未可子	3	6	2	2	3.25	2.25
13	花守ゆみり	4	5	1	2	3.00	2.19
14	内田真礼	4	2	4	4	3.50	2.13
14	沼倉愛美	2	2	2	4	3.25	2.13
14	上坂すみれ	4	4	2	2	3.00	2.13
17	能登麻美子	5	1	4	2	3.00	2.06
18	赤崎千夏	3	2	6	2	3.25	2.00
18	喜多村英梨	5	1	3	3	3.00	2.00
20	花澤香菜	2	3	6	2	3.25	1.94

順位	氏名	2018/4Q	2018/3Q	2018/2Q	2018/1Q	単純活性度	感覚活性度
21	本渡楓	4	1	3	5	3.25	1.88
22	水瀬いのり	4	1	3	4	3.00	1.81
23	小倉唯	3	3	2	3	2.75	1.75
23	伊藤静	3	2	4	2	2.75	1.75
25	佐藤利奈	2	4	3	1	2.50	1.69
25	大原さやか	4	2	1	3	2.50	1.69
27	上田麗奈	3	0	5	4	3.00	1.63
27	加隈亜衣	2	2	5	2	2.75	1.63
27	瀬戸麻沙美	2	3	3	3	2.75	1.63
27	竹達彩奈	3	2	2	4	2.75	1.63
27	小林ゆう	3	2	4	0	2.25	1.63
32	雨宮天	3	2	1	5	2.75	1.56
32	渡辺明乃	4	1	2	2	2.25	1.56
32	井口裕香	4	2	1	1	2.00	1.56
35	高橋李依	2	3	2	3	2.50	1.50
35	早見沙織	3	2	1	4	2.50	1.50
35	小清水亜美	3	3	0	3	2.25	1.50
38	種崎敦美	2	3	2	1	2.00	1.38
38	井上喜久子	2	3	2	1	2.00	1.38
38	渕上舞	2	3	2	1	2.00	1.38

1.4 傾向分析

今回の調査は2018年の1月から12月までの調査なので年間活動と見ることができる。

前回調査では佐倉綾音がトップであったが、悠木碧が10月期に多く出演したため順位が伸び最終的には1位となった。2位は前回と変わらずM・A・Oだが相変わらず存在感が全くなくステルス性は健在である。3位は前回と変わらず茅野愛衣であり佐倉綾音と同着である。3位内の顔ぶれを見るかぎり前回調査と変動はほぼなく2018年の顔と言えよう。

特記事項としては上位常連だった花澤香菜がまさかの20位と2018年後半で大幅後退してしまった。前回調査ではここ数年でデビューした新人が上位に喰い込みつつある傾向にあったが最終的には失速した。そんな中、本渡楓、花守ゆみりは健闘している。

三森すずこが堅調なのはブシロードパワーと推測する。日笠陽子、伊藤静が引き続き高位安定である。

1.5 際立つ状況

1.5.1 悠木碧

前回調査では4位であったが10月期で出演数が急激に上昇したため1位となった。ただ感覚的には佐倉綾音の方が出演数が多い感じはする。

1.5.2 佐倉綾音

前回調査では1位であり、今年の年間トップを独走するかと思いきや10月期で若干の失速。ただ、新幹線変形ロボ・シンカリオンにて4クール作品を務めているので実際には年間出演時間は多い。そのシンカリオンで幅広く知名度が上がったのではないかと考えている。

1.5.3 花守ゆみり

前回、12位、今回13位とほぼ同位。上位有名どころに混って大健闘している。新人声優の中で2018年でいちばん活躍したと考える。今後もさらなる上昇が期待される。

1.6 気になる動き

1. 本渡楓

爆死女王とまで言われて来た彼女だが今年出演数も多く10月期では主演を務めたゾンビランドサガが非常に評判も高かった。最近の新人声優の中では勢いがある。

2. 島袋美由利

7月期は主役級3本、その他1本という出演量の大沢事務所の期待の新人で10月期も強力なプッシュをしてくるかと思いきや結果はゼロであった。

3. ラブライブ勢

μ's組については特異な声の久保ユリカおよびブシロード/響の資本力で支えられている三森すず子以外は軒並芳しくない。

またAqours組についても鈴木愛菜の健闘以外は全くのゼロベースで低調。

4. 伊藤静

10位以内ではないがここ最近では常に安定してランク入りしている。声の幅は多くないが安定した「お姉さん」声の演技により数多くの作品に出ていると考える。似たような傾向は、井上喜久子、大原さやかにもあると考える。

1.7 定点観測

1. キングレコード勢 (水瀬いのり、小倉唯、上坂すみれ)

昨年勢いがあった水瀬。今年は順位が伸びず。前回、今回とも同じ位置に。今後の定位置はここらあたりになりそうである。上坂すみれは14位と前回同等のまづまづの位置である。小倉唯は23位とこちらも前回同等位置。キングレコード勢は定位置が決まってしまった感がある。

1. 花澤香菜 (5位→20位)

前回調査より大幅に順位を下げ、上位高安定だったはずが突然の下落。10月期で出演数が大幅に下落している影響である。次回調査まで要観察である。

2. 堀江由衣 (24位→46位)

前回調査では調査では大幅上昇していたが今回調査では再び下落。最近脇での着実な役が多い。

3. 田村ゆかり (24位→59位)

前回調査では上位に上昇したものの再び下落。引き続きメンタル面での不安定さ見られるがプロ根性を見せている。

4. スフィア (高垣彩陽、豊崎愛生、戸松遥、寿美菜子)

前回回復の兆しが見えたものの上位の戸松遥でさえ59位となってる再び低空飛行となった。後述のトライセイル同様、ミューレ声優に異変が起きているのではないか？

5. トライセイル (麻倉もも、雨宮天、夏川椎奈)

雨宮天については2018年も多く出演しており特に新幹線変形ロボ・シンカリオンが絶好調。一方、麻倉もも、夏川椎奈については低調である。こと麻倉ももについては2018年はアニメ出演数がゼロである。ミューレ声優にしては非常に低調なので原因が非常に気になる。

6. 野水伊織 (プロダクション・エース定点枠:112位→201位)

新規ゼロ。プロダクション・エース全体的に大幅下落している。来期はデート・ア・ライブの三期で出演確定。

2 ナナブンノニジュウニの衝撃

TCVV 議長

2.1 ナナブンノニジュウニ、発表当初

我々、TCVV は声優は演技を磨いてから顔出しせいと攻撃をする自他とも認める厄介サークルである。よってアイドルの声優化なんて以ての外である。

昨年、秋元康がプロデュースした声優アイドルグループ『ナナブンノニジュウニ』(以下 22/7)についても当然のごとく批判的な態度であった。当該ユニットが発表になった当初我々は『3次元に飽きたらず2次元にまで来たか。この守銭奴め。秋元の野望を断固粉碎せよ!』と左翼学生ばりに嫌悪感を示していた。

我々の心中では、所詮、AKB 亜流のアイドルユニットなんだろうと考えていた。

そういう背景があるので彼女らの歌はおろか、キャラクタや彼女らの名前すら全くの興味なしだった。

キャラクターデザインは複数の著名なイラストレータが担当しているだけあって良い感じだったのでアニメが始まったら見ればいいのかというレベルであった。

2.2 彼女たちを甘く見てた

そんな中、この7月から22/7のプロモーション番組として『22/7 計算中』が始まった。

声優批評サークルを主宰している者として、流石に何も知らないのは如何がかと思ひ、またちょうど冬コミのネタも仕入れる積もりで見始めた。

放送開始直後は各メンバーの紹介から始まったがモーション CG が間に合わなかったこともあり、よくあるアイドルバラエティに毛が生えた感じであった。この時点では然程の興味も持てなかった。

事態が急変したのがモーション CG が完成しキャラが動き始めた頃からだ。

中の人(アイドル本人)とキャラクタが見事にシンクロしていることに気が付いた。より具体的に言えばキャラクタの性格とアイドル本人の性格が大変良く一致していることだ。しかも各キャラクタが立っている。中と外が一致していることが判明してから俄然興味が湧いてしまった。

『声優あるある』ではないが、無口で清楚なキャラクタ役を演じている声優のラジオを聴いたら性格が全く反対で衝撃を受けたという話は良く聞く話。キャラと声優を重ねて本人を見たらガッカリしたというパターンは枚挙に暇がない。^{*6}

しかし、少なくとも現時点では22/7では大変良く一致していると思う。特に河野都役の倉岡水巴、滝川みゆ役の西條和、丸山あかね役の白沢かなえ。

3人については全く同じと言っていい。倉岡水巴は関西のノリでツッコミが非常に上手いし何しろ面白い。白沢かなえはキャラクター通りで何でも出来る。中でも特に注目しているのは、滝川みゆ役の西條和である。

滝川みゆというキャラ自体も不思議ちゃんなのだが本人がそれ以上に不思議ちゃんなのだ。何でこの子が22/7 オーディションを受けたのか全然分らないくらいの不思議ちゃんだ。

見ている方が色々と不安になるレベルだ。それにあのたどたどしい喋りでまともに演技ができるのかと思

^{*6} 涼宮ハルヒの憂鬱を見たアニヲタが茅原実里のラジオ番組を聴いて衝撃を受けた話は有名である。

う。

不思議ちゃんは演技でしたというオチであればホントに大物役者だが...

ここまでキャラクタが立った、言い方を替えると尖った声優化アイドルのユニットは初めてではないだろうか？

声優化アイドルの元祖ごった煮と言えばラブライブ!と筆者は認識している。いきなりアニメに出さずに各メンバーを浸透させてからのアニメ化である。当初、22/7もその方向なのかと思ってきたが蓋を開けたら全く違う方向性だった。正直、22/7のことを甘く見ていた。悔しいが秋元の方を見せつけられた感じだ。やはり秋元は、やり方が上手い。

2.3 秋元の恐しさを見た

秋元は従来の方式を踏襲しつつも 22/7にてキャラクターと中の人とのシームレスな関係を打ち出し潜在的にアニヲタが求めている声優像についてそれなりの答えを出した。

従来、我々の考えている声優像とは別の方向性だが、秋元はアニオタにあるニーズを確実に具現化している。これを垣間みた瞬間に我々は秋元の恐しさを知った。

2.4 評価はこれから

TCVV 的にも注目度が高い 22/7ではあるがまだ彼女らが本格的にアニメなどの演技をしていないので今、この時点では彼女らを声優とは呼びたくない。^{*7}現時点ではまだ声優化アイドルと言うのが妥当だろう。

声優というのは色々なキャラクターができてこそである。

22/7は声優化アイドルとしては大成功しそうであるが、この先に職業声優となれるかと言えば現時点では難しいのではないかと考える。

懸念しているのはあまりにも 22/7のキャラクターとの整合性・相関性が強すぎることである。相関が強すぎると 22/7以外の他のキャラクターが出来ないのはと考える。

それもこれも現時点での話であり将来的に大化けするかも知れないし、秋元はそこまで考えておらず、単発のユニットとして終らせることも考えられる。

プロジェクト終了後、各メンバーそれぞれがどのような道に進むのか非常に気になるころではある。

いずれにせよ 22/7の評価はこれからだし TCVV としても継続して観察してゆく考えではあるが、くれぐれも秋元の計算術中にハマらないように注意せねばならないと思う。

^{*7} 西條和についてプロモーションアニメでも殆ど喋らないのでホントに判断できない。

3 ラブライブ!声優の動向について

TCVV 情報管理部 調査課

3.1 μ's と Aqours

もはや誰もが知っているラブライブ。既に『アイドルマスター』という巨大コンテンツがある所にアイドルアニメがヒットするのかと思っていた方も少なくないと思う。ところがアニメ放送が終わって見ると東京ドームでライブを開催するなどアイマスに劣らない巨大コンテンツとなった。しかし彼女達の本業はあくまでも『声優』であり、『ラブライブ』という後ろ盾が無くなったあとはどうなるか? ファンがそのまま付いてきてくれれば問題が無い訳だが、世の中そんなに甘くない。

そこで当初予想をしていた事*8が現実となっていないか調査を行った。また、後に続いた Aqours の今後についても軽く予想してみた。

3.1.1 μ's 解散後

ラブライブ!第1シリーズ放送終了後の2013.4~2018.12を調査対象期間(但し、ラブライブ!2期及び劇場版を除く)として、各自の出演本数や音楽活動について調査を行った。その結果を1に示す。尚、参照元は全てWikipediaによるものである為、多少の誤りがあるがご容赦願いたい。

μ's 解散後、メンバーはソロ活動を強いられる訳だが当初の予想が9割程度当たる形となった。

表1 ラブライブ!1期放送終了後の各自の活動状況

	アニメ (TV,OVA)	CD (1st 発売日)	ゲーム	吹替	舞台
新田恵海	20	7 (2014.09.10)	28	5	8
南條愛乃	27	12 (2012.12.22)	65	0	0
内田彩	44	8 (2016.11.30)	56	2	0
三森すずこ	64	18 (2013.04.03)	64	9	0
飯田里穂	19	7 (2007.08.08)	13	1	2
Pile	6	14 (2007.10.24)	3	0	0
楠田亜衣奈	22	7 (2015.10.07)	13	0	2
久保ユリカ	56	4 (2016.02.17)	58	0	0
徳井青空	53	0 (個人名義は無し)	64	1	0

元々、響という後ろ盾のあった三森すずこ、徳井青空。メンバーの中で一番声優歴が長く、fripSideのボーカルでもある南條愛乃。今となっては歌手業が本業かと思ってしまうが、元々声優デビューをしていた新田恵海。それと個人的には「キディ・ガーランド」の「アスクール」のイメージが強い内田彩。以上5名はμ's解

*8 個人的には飯田里穂、Pile、楠田亜衣奈、久保ユリカは消えているだろうと当時予測していた。

散後もそれなりに生き残れるだろうと思っていし、現にそれなりに声を聞く。

その一方で久保ユリカ、飯田里穂、Pile、楠田亜衣奈の4人は消えるだろうと予想をしていた。

しかし、この中で久保ユリカだけは予想を外してしまった。彼女はラブライブ終了後も主役こそ無いもののそれなりのポジションで出演しており、回を増すごとに良い演技をするようになり今期（2018年秋アニメ）でも『青春ブタ野郎はバニーガール先輩の夢を見ない』で主人公の妹役というポジションで出演している。

歌手業が本業であったはずのPileは武道館で単独ライブを実施するも箱が埋まらずラブライブと新田恵海を餌にして何とか埋めたものの、今年8月に出したベスト・アルバムは大爆死という噂。

楠田亜衣奈にいたっては2017年は徳井青空原作の『まけるな!!あくのぐんだん!』に1話だけ、それもナレーションとして出演以外はちょい役ですら聞かなくなった。

つか夏コミ最中に2日間、それも1日は地方公演（仙台）とか完全にヲタ舐めとんのかと思う。

それでいてTwitterを見ていると必死な様子が伺える様なTLが飛んできて可愛そうにも思えてくる。

飯田里穂は今期（2018年秋）「寄宿学校のジュリエット」のEDを担当しているものの本編ではちょい役、いや出ていたのか?というレベルである。

3.1.2 Aqours の今後

それでは後輩にあたるAqoursの今後はどうだろうか?これもμ's同様活動状況をまとめてみた。^{*9}

正直、第2期シリーズ終了後は全員消えると思っていた。

しかし、2018年夏アニメの『邪神ちゃんドロップキック』で主役の邪神ちゃんを演じた鈴木愛奈だけは今後の動向次第ではかろうじて生き残れるのではないだろうか?

あとは伊波杏樹。彼女は舞台女優がデビューという事もありそちら方面の仕事が多く、今後も声優としてよりは演劇での仕事で生き残れるだろうと予想している。

それと小宮有紗も元々が女優という事でありWikiでの情報を見る限りドラマや映画にはかなりの本数に出演しているので本業としての声優業はやるつもりが無いのだろう。

その他のメンバーについてはほぼゼロと言っても過言では無い。

そもそも、ラブライブ関連のライブやイベントのスケジュールを見ると相当過密スケジュールである事も解る。

現に今年、2018年は1月ファンミ福岡と上海。2月ファンミ名古屋と台北。3月ファンミ千葉。4月函館ユニット。6月3rdライブ埼玉と大阪。7月3rdライブ福岡。8月アニサマ。9月ファンミ名古屋。11月4thライブ。12月ファンミ福岡、仙台と、この他にも細かいイベントがあったり、9月以降のファンミはユニット別とはいえほぼ1年を通してAqoursとしての仕事が入っていた。7月にロスアンゼルスで開催された「Anisong World Matsuri at Anime Expo 2018」へも参加、帰国後直ぐに福岡で3rdライブという日程も酷いなどしてしまった。

こんな状況で本来の声優としてのお仕事が今は人気で入って来ていたとしてもブームが去った後が不安で仕方がないが、今は予想通りの結果にならない事を祈るしか無い

*9 ラブライブ関連のCD、番組、ゲーム等は除く

表2 ラブライブ!サンシャイン!!1期放送終了後の各自の活動状況

	アニメ (TV,OVA)	CD	ゲーム	吹替	舞台
伊波杏樹	3	0	1	1	6
逢田梨香子	6	0	5	1	0
諏訪ななか	4	0	8	0	0
小宮有紗	1	0	2	1	0
斉藤朱夏	2	0	5	0	0
小林愛香	2	0	4	0	0
高槻かなこ	1	0	5	0	0
鈴木愛奈	8	0	10	0	0
降幡愛	2	0	3	1	0

4 声優システム論 14-声優化アイドルを考える-

TCVV 議長

声優システム論とは

現代声優はアニメや洋画に声を当てるだけの存在ではなく社会や経済にも影響を与える存在になり、その動きは一昔前の古典的な声優観では説明出来無い。

そこで現代声優の振舞いを複雑系として捉えることを考え、この系を『声優システム』と名付けた。^{*10}

本論は『声優システム』を様々な角度から考察するものである。

1. はじめに

今回は紙面の都合上、短めとなるが平成最後のコミケでアイドルの声優化について考えたい。

2. 声優化するアイドルの流入元

今でこそ声優への入門は声優養成所からが多いが歴史的には役者からの流入が最初である。似たようなパターンでは子役から声優として転向するパターンが今でも多い。花澤香菜、悠木碧など小さなころからテレビに出ており将来の活路として声優を見出したのだろう。

最近、多くなったアイドルから声優への流入は歴史的に見れば特段に珍しいことではないが、そのパターンがいくつか増えていると思う。現状、多いのは概ね以下であろう。

1. 特定アイドルのプロモーション

特定アイドルのプロモーションのために政治的な力により流入する。大抵は1クールで臨時的に声優化するが稀にそのまま職業声優化する例もある。^{*11}

2. アイドルグループ卒業コース

最初から声優を目指すわけではなく AKB やその関連グループで知名度を上げてから卒業後に本来の目的の職業声優へ。途中から声優志望に変わり卒業後にジョブチェンジする場合もある。

ちなみにアイドルから声優に転身した者は現状、軒並み低空飛行である。しかも、あまり声優として活動していなくても声優と名乗ることがあるので腹立たしい。

3. アイドルアニメコース

アイドルアニメを構成する素材のため職業声優ではない畑違いの場所から流入するパターン。

アイドルアニメが終了した時点で声優として活動しなくなるパターンが多いが久保ユリカのように生き残ったパターンもある。

^{*10} システムたる典型的な例は声優のためにアニメが作られるようになったこと。主従で言えば、従だった声優が主になったという点から見ても『システム』要件を満たしている。

^{*11} 9nine の佐武宇綺など

3. 声優化アイドルの弊害

アイドルからの流入の中で一番の害悪が期間限定でヒロイン役をしてしまうことだと考える。記憶に新しいのは「ナナマルサンバツ」の川島海荷。少し前だと「電波教師」の松井玲奈だろう。いずれも日テレというのがアレだ。ロクに演技が出来ないのにアイドルの売り出しのために起用されたと思う。彼女らの売り出しのために作品がボロボロになってゆくのは見ていて忍びない。演技が棒すぎて肝心なシナリオが頭に入ってこず継続視聴困難になってしまう。我々、TCVV が一番に嫌悪するものだ。

4. ブラック事務所は本人のみならず作品をも壊す

アイドルの声優化による弊害は別の形で出る可能性がある。従前、声優は声優専門の事務所がメインにマネージメントすることが多かった。しかし、声優ブームにより声優は金になると味をしめた奴らが事務所を次々と開業した。その結果、ブラック事務所も多々ある。

働き方改革が叫ばれて久しいがブラック事務所が地下アイドルやローカルアイドルを奴隷のように使ってしまい自殺させてしまう悲惨な事件も起こっている。またアイドル路線で強引に売り込んだり、粗製乱造された役者モドキを多数生産することで作品が破壊される危険がある。

ブラックな事務所は誰も幸せにならない。それらを潰すことで人間も作品も守られると考える。

5. ナナブンノニジュウニ (22/7) はパラダイムシフトを起こすか

秋元のアニメ進出と聞くと AKB0048 という悪夢を思い出す。筆者も当初はアレをすぐに連想した。だが、今回は様相が違っていた。いわば仮想環境を作りキャラと中の人との同一化をしている。また現状では仮想環境外には出てこない。もう少し言えば「中の人」が 22/7 以外の作品に出演することはない。中の人が閉じた環境以外に出ないことで従来のアイドルアニメ由来の声優化アイドルとは違う側面を出している。我々として一番心配していたのは 22/7 という枠から出て他の作品への声当てという侵略が行われることである。今のところその心配はない。ぶっちゃけ 22/7 には、声優として演技が非常に怪しい人がいる。願わくば「声優」とは名乗らずに徹底的に「中の人」として存在してほしい。

22/7 は従来の声を当てるといった既存の概念からのパラダイムシフトを起こすかも知れない。そして秋元は「22/7 計算中」にてアニヲタにウケる計算をしているのかも知れない。

6. 今回のまとめ。

- アイドルアニメでアイドルからの流入者が増えた
- 声優化アイドルは軒並み成功していない
- 声優化アイドルの致命的問題は棒演技
- ブラック事務所は潰せ！
- 「秋元康、計算中！」

5 Chairman's free talk -議長放談-

TCVV 議長

1. 松永真穂

Stylips メンバーとして所属していた松永真穂。Stylips は『ゆいかおり』+ α という認識している人が多いので知らない人も多いかと。

その松永真穂。スタイルキューブを脱退後には主にライブ活動をやっていたらしいが、元アイドル声優とは思えないくらいのぶっちゃけ発言で一時耳目を集めた。

所属していたスタイルキューブには相当恨みがあるらしく 12 月に行った自身の最後のライブでスタイルキューブの闇を語ると喧伝していた。(確かにスタイルキューブは良い噂を聞かなかったが...)

結局は何も語らなかったらしいが是非語って欲かった。

醜聞が聴きたいという訳ではなく声優自身が内幕を語ることで声ヲタが声優に抱いている幻想を打ち砕き欲しいと思ったからだ。このことがひいては正常な声優環境を取り戻すきっかけとなると思っていただけに非常に残念だった。

2. 棒はホントにやめて

秋アニメで久々に強烈な棒声優がいた。『ソラとウミのアイダ』での薪真紀子役の米野真織だ。その強烈な棒読みから『まきまき棒』と言われていた。どうも彼女は声優ではなく女優とのこと。もうさ、アイドルとか女優を話題性だけで起用するのはやめて頂きたい。

3. 抑揚がないキャラは棒になりやすいのかも

一般に抑揚の無いキャラは棒になりやすいのかと思う。

『あかねさす少女』にて黒沢ともよは二役を演じていた。明るいめのキャラと、もう一つは冷静沈着なキャラで喋りは抑揚があまりない。

明るいキャラの方は聴いてもさほどの違和感はないが、冷静沈着なキャラの方は棒読みっぽ聴こえた。

抑揚が少ない喋りはどうしても平らな演技となりがちではある。しかし逆に言えば抑揚がないキャラの演技は声優としての力が試されるのではないかと思う。

4. ほんと声優アワードって何なの

2018 年新人賞の二人。七瀬彩夏、福緒唯はともに低空飛行だ。特に福緒唯については声優業に専念するとして A 応 P を卒業したが今年テレビアニメ出演は 0 だ。

新人賞受賞者が必ずしも活躍するとは限らないが、いくら何でもこれは酷い。

以前本誌でも声優アワードの受賞者予想をやっていたのだがあさっての方向に行く選考では意味が無いと判断してやめてしまった。

さらに来年は MVS(Most Valuable Seiyu) という人気投票も創設されるが従来の最多得票賞との違いが全然分らない。本誌で何度も言っているように声優アワードは色々と限界を迎えており回を重ねる毎にボロが出るので早々にやめた方がいい。

編集後記

本誌をご高覧頂きありがとうございます。

今年前半は ISLAND 問題や声優アワードの新人賞の問題があったものの後半は声ヲタにとっては比較的平和だったのかなと思います。

キャベツ作画を超える以上の酷い作画の『俺が好きなのは妹だけど妹じゃない』(通称:いもいも)で全てが吹き飛んだというのが正直なところでしょうか。まあ、声優にはあまり関係ないのですが...

強いて声優に関して言えば松永真穂の件ぐらいでしょう。地味に効いてくると思ったのですが知名度の低さや内容から不発に終わりました。

不発といえば文春砲も全然不発でした。TCVV としては声優業界を正常化するための必要悪として少しは期待したのですが声ヲタに耐性ができてしまった所為か、はたまた話題が微妙だったのか全然駄目でした。

さて今回の本誌の内容は平成最後ということでアイドルの声優化について本格的に考えてみました。

まずは当サークルでも熱烈なラブライブ!!ファンによる記事。ラブライブのメンバーが声優としてどれだけ仕事をしているのかの調査です。前回の編集後記でも述べたましたがアイドルアニメでデビューした人達がその後、どうなったのか長期観測は重要と考えています。

さらに秋元康の新プロジェクトの 22/7 について。

本文でも述べていますが、これは当初考えていたものより手強いと考えています。我々は特定の作品に依存した人々は3年も持たないと考えていますが、これはひょっとしたら大化けする危険性が出てきて要注意です。

22/7 は未知数ですが A-1 Picture をはじめソニーグループによる強力なサポートがあるのでビジネス的に成功すると思えます。第二弾、第三弾も来るかもだし、新たなビジネスモデルとしてこれを真似た亜流が別のところから来るかも知れません。

しかしアイドルアニメ用に製造された人は「声優化アイドル」という別物として認識し考える必要あると考えます。

ただ TCVV としては声優と名乗らず閉じた世界の中でやっている分には別に構わないと考えています。仮想環境にいる限りは我々の思想とは共存できるのではと思っています。つまりは 22/7 は現状全く問題がないと考えています。

こんなことを書くと TCVV が平成最後のコミケで狂ったとか思われますが手放しに認めたわけではありません。

中の人声優と名乗ったり別作品に出てくるようになったら我々は容赦しません。作品の保護が最優先であり徹底的に叩きます。

いずれにせよ平成から新元号に移行するタイミングで大きなうねりが起きるだろうと思っています。

前回、TCVV 短観について今後集計方式を見直し旨を述べましたが年間集計をする上で今回までは従来と同じ方式としました。次回新元号から新方式で行く考えます。

平成最後のコミケと言いたかっただけの編集後記でしたが次回もよろしくおねがいます。ではまた。

2018 年 12 月 28 日 TCVV 議長 萱沼真一

TCVV 白書 第 21 号 通巻 24 号

発行 「声優は Visual に出るな!会議」 情報管理部

組版 L^AT_EX2e (Cloud L^AT_EX)

発行日

2018 年 12 月 29 日 (初版)

連絡先

「声優は Visual に出るな!会議」

代表者 萱沼真一

URI <http://www.tcvv.org/>

E-mail info@tcvv.org

Twitter <http://twitter.com/tcvv>

Copyright (C) 2018 The council of 'Voice actors should not appear in Visual'

